濫觴無底抄

特別
へ12
1077
16

利
1077
1516

1077
16

蓬生

廿七歳

源氏君遷須磨給後常陸姫君孤
露御栖居事
宮中荒廢事
已上是ハ源氏君廿五六七年間事也
大概と見ルへし
源氏帰京事
十月故院御八講事

摂大納言とみしころ
姫君御乳母侍従伴姨大弐北方
下向筑紫事　已上源氏廿七歳時
廿八歳
四月詣花散里路次見付蓬生
家以惟光御消息事
同時源氏君分入蓬生家行事
道家嚢於蓬生家又令拂庭草
木事

可奉渡二条院東院之由申行事
已上當年の事也此横乃並とふ
此巻乃詞云二とせはかりこのふる宮
にながめ給ひてひんかしの院
といふ所になんのちはわたし奉
りたまひけるこれ
詞にて親行かりハ関屋の次
蓬生の並とてまつ組此巻の前後ハ
四月より源氏のまゝふ乃露

とゝのひたる事なし
関屋乃まへを九月九日石山まうして
の事をいへり旧月と九月とかち
かはりけりよりて蓬生関屋と並
を次とす二とせちかひの詞ハ物語
書作者の筆乃ほかにてはかなる
ならひし河内親行説とは両流
なりと角也

蓬生 並一 以哥 并 詞為巻名但蓬が
いかにも蓬生とはしるしたり
詞ハなし
詞云免々にけさせ給ひしき蓬の
露あまさりけりかん物と河り哥あれ
たけきよりさのとあり
此巻中無蓬生之詞然常陸宮
旧縁蓬蕪屋而生罪と見し女
又哥ありたけきよりもとつりその

又ことヽ詠せり蓬生同事也
蓬生事　杜詩云　蓬生非無根
漂陽随高風
天寒落万里不復帰本叢客子忘
故宅三年门巷空此詩之心自相
通乎
（於）いそかしき置さつらん　蓬生ハ人も
かよはねやとのみち
関此物語の巻名になれる事也と

云ても源氏也し　是毛詩ハ篇名
例にもあり　此物語ハ巻名のま
ゝにし事をいひあらはしてかき
損ハなし　荘子ハ逍遥も遊の
字ハ云てつゝき

並事
横の並ゝ源氏廿八才の事なりしかハ
はりすりゝ　蓬生ハ君ハ続きとさき
あゝりよりてそこしかハ源氏ハをと

すへらり給て洛京の事をさき
給へりは又二と世をしれる事よ
そなへ給て二条の東の院に作り
おはす事との世かりこれは御縁の家
になきさらへたる事也なま志き御さ
しくにもさるみの宿をまうけ給く
こなたへ給し事源氏十八巻乃
旧月乃事也
覚をとりて横の並りはとまるへし

此巻より横乃並也源氏十七巻
事也八縄みえ給し事とかてより
て十八まてみなくし乃巻は
事ありて又巻の竹より二と世かり
此ふる事おりさりかねてとおり巻
を覧によ成あるや然巻のうちと
出るへし中に横覧の並也
或御縁よりしされ巻とかねもて
より並をとりて並とあつかひ

そり此事といふ本まこれ説ニ用之
私並の了す南流一人〳〵の猶記の義
をも用ふこれりて心得すへし
此巻は帚木の巻の並也これは
源氏の内の此ひの事なり二条
ひんかしの院は帚木のうち〳〵住
ありさまなりそとけりしそのうち
よふるき並の巻とよけて源
の四よりの人々は源氏十八歳の時此
田月し此事坐ての内ぐるしへは
名とする心得へし

さしかれてきぬのしさうかひ
河紗平
ちくるとひとふ人あらは源氏なかに
りしられつることよ

源氏花迎の時の事とまきの井

あまさかりの事とまきの

されハえてくらの文（未詳）し乃事と

うきらつきんとて源乃渡ノ乃

かけらむの事とうきつさせける

いたうさの事とくらひ出しるき

さて乞うら御労のより所あるはひと

うさのありひてそ

みれくとより所ある人源り

わり迷ひなけきうらむし

是れを一うさのありひとつて

源氏の君より落のれぬよなけ

こさし

二条のうへをうる

紫上し

まちびの姫まうくる

紫ハあまひのやうなれとも別して

の御なけきしされならされなし

又猿居乃さ為とも拾ひ字かよ
ひともあしきなし
くらゐとさかりのすへかたかは流
かう（河）し流よりをひ猿の流そくしうり
うわのなし
源乃源右北事するへし官位と
とゝまるへへの雙本と
行北らの世のうきみし
此（弁）世北ら紀ありしといえんとらく

行とさゝまるいし西向し
藤（で）雲女院を東京をもち行尊
あらさゝのみをいとかや
私尊圓の筆あやまりまり弁筆よし
字年と（古法あとひいけり）さのに行あひらん行成の
うきみし若けさまんさしすや
拾遺のよ弁北ら世をんきまて
あみしそて河とありひつるを
武御院よ行の云北世とん古今

乃序にむりきまの人とれねる
とくにみえし也又わ持しと
いろんしあし花宴乃巻にも
中しことれうとも人の子と也まれ
源に教そうてとをのりうくいおりもも
あさうもんすちやがこれら中にく
おりひのふさしこれを海をまうり
にとひのかな也
立てられのさひしれきのさ海をとよ

夜の事に
源へ御いと海にひさくやさねくつく
乃なし
さうられさや乃君は
是よりをすむつむれ事ともし此前
極別のくりのかし
弁
末摘乃事し上の納た末摘みをと
いろんとてまりくしみれすとい
ひとつ

まことありかたき人も
父母ありしまさてみえしとふれハ
人もなく
さひしけれハ娵の
娵のおやしかたへかよひし事
いかにも御いさかひなとそ
娵の内よりわれ事なとありし思
夫との御そこくしい 夫婦乃御
なかは いかにしき事なれとか

ともやし
大名乃かりしれときりとなりひのあるよ
うたしとる　竹 盥水(タライノミツ) 盥
娵のましれ御ところをも申
たむ乃なかりていかしきる
とのたまへし
寿
手洗まゐてまゐらし
江
七りよりも手洗水を膝に
そさて 盟合の気をうたして

かゝる事しらで楽く源氏と大
名のりたまへて花の名川かゞは
なきけると蓮生君乃申ちえる
よろこべるらし

やゝて世のうくおもひしられる
源の世をおもひしみそれなるまゝ
まにそむきすれなるまゝし
うち忘れるやまて
(兼)剣しもての物い寒りわ忘れ給

そねかるべし
とゝろおもしまじは
大海のうしろ事しよりそへなと
いつそのゝわねとと
うれなきりよ志りしい
源より前へ流そこかひのかねわし
かるき女のうちとは
わか身極楽意ある女すぢのさかせひ
やるべし

ゆかしき峯しせ
末摘乃果報なき事をおほく
いひて
紫えしけのおもはれ
源の此事をとりなし 織りめてたきの
此いとみしもあるおもしろし
大かたの世花事といひなりつ又なとのむ
うらめしきこれありしさ後こそ
是ハ源の此すハ大かたの世乃かけ

きしさまをゆるよ源よりかけ
しのひしこともさ末摘のしかめつか
乃やうよろしさこひふれ
作るかうとはありつうこつかし
琴
きんしきんすゝるにはのすや
をうしよりさてすくしふけ
りとかありしきりしさ物みのこ
おもひしを源の此ときみりて
中法ん宇してもうしかはし

松人との色川なみさはまとり
もみち色へうつしせよかな夫へし
せひすけく色しとは草の地り
とゝしつかりてうくん
またありおくさへりしきとのつゝま
いりつきて
源氏物語との相よりへうへ集
色さゆへおりへいろみ集りしも
こわつらしくみせうひて

又縁ありてさうひてまみしくみる
ゆきちるとも
女三の宮にいのちてうたね給も
せし花つかひて一所色有り
うつもちてありけりつゝも又花よ
とすゝむへし
ひとつろのすゝうにみりて
付 白氏文集山寺鐘の心
夕乱きてよおり

あとゝさまよへ
木ミゝもおふりてなりけるは
さ候し
ふくろふの詩をおさへたり
异 梟鳴松桂枝狐蔵蘭菊叢は
いふ白か詩の句なし此詩も荒たる所の
のんし 松桂叢菊に梟狐すみその
まむ所さらはおもねなりし
こ候すましらねおもか所えそ

樹神 順和名 粉神 内典 木魅 山鬼
魅 玉篇 木霊 延喜式 物精也
异 こたまは樹神也されはかきちうと
ありしとなきか
我子細のしるしはいれ給ふさ候也
閑かさらはあるまのしりて物すさまし
さ候をとらかて
いかうさ人を耗にてきりけるに
おりもの人のまへうさきし

はるのをやよひはおもしろさ
家にあり
このさとは木のおもしろさと吉野
のへみなさかしうき
かとりゆりつさて
おもれは後よつけそし
物おもふしうね
はなのたけ文須みとにくるまちゆく
せこらくんかさき　あゝ川ろ似錦

へうしとさゝかぬ〳〵のまくこと
こゝまくらやや
おもしろしや
新
来橋の柳
あやの流うけとありしらてなちすら
おもしろくあはれなるせり
はてしとどもいとこそは
むかしは比翼鳥とおもうさとや
まるあのゆくさるんと

是をもと時よりあひうる人の昔あり
と思ひ給ふへきことにふさして御教ふ
するよしの人の事し
云御物えらして　を用してと
わさとその人ありの人へり
并
調度とるを物の上をとる乃名
あらかりし志とらせの人ありすと云ふ
つうふ家人の所定とするし
そこうへよの一つ様の事とて

も
封書をれいさやしの用字をれは
うるとをみ川もえれてそよのつる
の事みれとらふし
めりしちよきまでふあるとれ見へうし
さこと
歌りのしてまも多えくのさ海
まるへし
みよれ是ひててそ
常法文の志とさきの人ありる我れり

君なとてさせ給ふ給へ人
乃家れかさりけれはさしと
末摘の詞也
宗廟之器不鬻　於市　礼記
とふひまこゆる　別りまつれ
なま家人のつかさし
多く御せうとのせうしの君
常陸宮 ― 阿闍梨 / 蓮生宮
末摘トモイヘリ
ことはこの禅師の君と醍醐のあさりとはいへる也源氏の八講にまかりてくさにいかりしとの御けいとて給りさまはかりもしく

末摘花の巻に源氏君にあひまゐらふる事うひのまま

おほしきれしとふ中々も
おほしきれしありしきか
師の葉し
きすくるはんし横川巻よりここ
しくしきうちくの僧都僧正
のきうてまゐてとある也ん

世俗に木男といふなるへし
あるいは寺をといふへし
木法師といふ経不書云同しき
法師の中にもとし
閑同し木法師同しき法師あ
華あり
藏経　四海　花鳥のさかりしと
あるいはうつし甚し紀浮し
見すむてらしミと

素川さらす
此所さり花もかへし霞なる色
しんを世上の事よそりあけね
ミしアとんすへし
志けき草よりささらに
これより下の有まて海さ海道する
すり及りん
むかしはふしこんうしの御門と
八葉むかしして門さきへて一れ

哥の名

角まきうちするめくてかれかさと
誠にはいひならそなへし　伊勢物
語くしまねかさにひらかれ云れ
狗りいふ又れ者みかけるは
はいひらの角まきとあるをとなり
よへ殊時の狗りハ門かりしも
えいふそかきの角まきよりかさい
きりと書之うきり

あちらしかけ中まされ名なくて
総角　助ハ毛詩　憶(オモフ)汝総角時
東坡詩　総角ハ童名なれし
ミつゆひするあさのきされとし
鬟　牧童のよし
続国哥枕云　冠者式ハ小童れなきと
秘説あり
閑西白まき猶　別乃義あり
うきて

八朔野まさはつうりし
いはの年まてもおもくし
志まやとの
新舎ともまろくし
そふりの色え
鶴のかれ燃しはつれなるき海し
ねもころすさひしをさいるん
名ころ娘るハ編乃字し　類字抄り
ありきく

この家をとふよしの地よ
おりひゆりれさひし　書れたる用
なつさゆくよりつね
賊貪家をとうことゝいふ心よ付つか
不要物し　在家乃事し
いこしきのつや梅なれと
野節等　萩
里はあまてくかうすし宿なれや
庭も海うさる　秋乃のつなる

奥義抄云のこりし　万葉には草字
をのこともかく
はやくにかいつきうすとするへきなし
貧家静掃地といふなし　東坡か詩よりて
私此詩引て見るへき也
案詩をよく見れは貧きものゝ事なるへきゆへは
浄き地をといふとひうすとなるとし　此詩の
こゝろもよく地ハ掃ふへきなりとなきと
閉貧家浄掃地貧女常梳髪　東坡二三十九夕　東坡か詩

うゐのし貴賤の事
藝といへれとときこゆるとたゝそれ
ある古哥なるを見し
さもあるにある哥ありしか
古今にも猶哥をもとにそ見る
すまひのうつしさかなるをりにそ
の事も見るとこそありけれ
とし
さをりこの見えしかりけると

みかよりしうすき女ともゝはかなき
あるはこのかねて事すゝされなむ
かやうのつゐしくうはあそり給て
くあしかこねあそりはえの道そ
しみえる存中をちくゝあれ
もそうしつきのよしし時の后とう
しみそくいもうくあはすること
男は方きのみの事まいあつす
女ちの為つれなきゝたつたまし迄

からもりはこやのとしのものかたりの絵
(異 一説会臣) からもりはこやのとしの古ものかたりの絵
(河) 唐守藐姑射刀自蘇芳姫いつれ
も古物語し (異 日)
(河) 弊 (一にサクル)
おしきやうりあいをきまへゝきる
あそりし
顔をも　後くるし　世の給者
そまり

関額をもよまん人もあやまりなし
とよめる也
うるはしく書かん人やうはれみちのくよ
みかと
紙屋紙　陸奥国紙　檀紙し
陸奥より檀紙をとすさへしむ
檀はまゆみの木也　万葉に
みちのくのまゆみの紙とはかり
紙屋川とは小野平野の中を
南へなかるゝ川也　仁和寺川と
も号とそ　此所にて紙を
すきそめし　紙屋なり
もとは紙すきしけるを世もてみなかみ
或本檮の古跡なる事とあるあつ
めしかまに古寺の事とは
いふそ双紙はさなと古跡なる
やまうちよりなり
いまの世人の書紙をかうかまし

弁
此節よろつきゆへし
私むつしハ御かんこときことも
せねし文数珠すとりし事なせ
さりしし有た公乃事ともけり
みも紙笥をとるなかとて摘扇よ
て数をとりあみとわるらん
かゐりりうゆらしくそりのし
けける
末摘の古衣をゆさ面をとらひつきも

多ゝ徒然
侍従をとらひし浜先んとく
末摘君ハ乳母ハ女
河うれそね
これも時ゝ新流へ来りしをしゆまち
河うれそねとらへ分西句へゆまち
かうひ来りし新流
河
葵乃まよ知り
弁
此新流絆とゝなし

此方君それ君それさのこうかう
末摘乃とそし
常陸宮也此方此末摘のいまたに
とらはれて受領のかにまりて
みるへし
むすめとまうしつき
末摘のを伯君女とゝし
ようしきうらへとゝもむけかしらね
取まりハ

升
末摘乃方の女うまと此一向しらね
取まりつてて受領の此方此まと
へ行かのふとて 花為従同し された
末摘ハ此しゆうれとし
さかね取まりゆうんまりハあやまと
もましてかるひしそとこひて
侍従かつゝよ此人ともうすなし
私これハ侍従一人の事とてきまへ
し妻るへそりしを伯受領の

北方は所よまゝし武ゆへ人なれと
もはれと西下りしられね所
乃やしなひなし九州まして侍従
か行かれなしおやなるとも侍従
か親のうし

人ととめれくせ

末摘とは上臈しく古体なるの
ことは君なりもまつしもらひ無し
行かねし

きのまことはおもしめ給ひて却て悔
せしり

末摘のことは君のらよやましらるに
受領の妻となりしをとて来つむ
の御母方なるとなりありてまし
みりとありひらひのへ今なるよし
臨とは君の心意つむのとられ
の人今なりおちはてゝら
箱し

ありけりつきさまかはかはる乃
うゑしのへて
花
此段を大かたの世中のならひになると
いふしうちとへて種姓のあしきも
我身をおもひしおもふさまのみあはれ
みおもひもけりし入道人となくさ
もろの人もあやしきへうけむを
かくまねは下にしきみちむひと
もすなをひしすゑつむ君乃
とは君のありさまをとりてなとく
しきは下にしきんよりまつら
弁
末摘のなれし事をいうんとく
花世よけるなるしの果ある人の
事をとをかなの果たかくらね
人れ妻なるれ中しくおもひあり
上﨟しき事をそのさまのひ
心をもしるる事ありし入道人す
みさすなるへみるれをとらふ

なおしき
けれすまし思し
みとてらけ
つきまらへし
在業平のまし

まねくさゝ當世にや交順ならせの
妻とありて人もみなとしなきし
末摘のとはの事をとへら
私宿掛の儀にそよしきりこゝろ
しかりとよろこび行りほどきらは
さやうの事もしれんとれ交風なる
とかくれ人乃業平ゆゑありな
と行るは中りく經ともあともる
もちあまりんとよきへのおもひと

ちんとすまや　此末つむりそれ君
あとれ人の若きすれにやむことな
きすめらしかゞの交風なるの
妻まるのはやとし人のみなとし
くだすしあをとらして
みとし来流をとはまそれはいけ
色は墓子北地に嘲哢てうけるや
ものかくおそりの之内にて
常陸宮のあわせし　時はなまのね

をみなしをとめてたまりつく
わかれまて　は君ゐ多しのうゑと我
むすめともゐうしろとは結びけた
くもふしをつきんさ雪のえし
ろ海を世すまこゐつるひ
末摘乃君の心ゐとの世りあまし
をとりことも　くくしく心尾すさ
うしろとすかんとうるむすあに
みへらしせて

ゆくとの継も
とる君のうちへおりして跡みとる
そし　へのへとうしのれ
人ないとむしんりわまて
末摘の心ゐをち一れくるはま
をおし君りりんしもすらふ
我枕のうちにいあって物語し
ころ心より枕に比かまひ行をね
と夜枕をちてのふとよと君

は縁ふくせてし
かの家はなし　太貳はよそりね
なとし君はおとこ太貳は仕すると
むとめとらさうんまさ海より
太貳の女とも世りはうせつけて
仕はありむうんとすると
この君とれもいさみうへの后
末摘のうけひさ紛つねともみと
いろしくなりふし

ことよりると
都よりあまりすくておもとせん
ありとみさうきと縁んこゝの縁
をとみすると後りおもとね事
を剤りらふとゝとよさとらふ
されてす忠つむのことみせてる
そねし
はかなくとしや
とて君は泪しらう　服亡しうる

さ候をよく〳〵きゝとらんかなかも
けつり
いかにふかくりとし〳〵すめくと
大将殿も日　萩原
河 源氏還任大将事不見児女房
かくとりのとく〳〵やつけるは
らしれ
私源語家のさきかりともない
よくし〳〵　女かたのらひつけるら

さ候かく〳〵
えん〳〵うけ誓まか
河 誓うけひのろ〳〵しき詞
呪咀や日本紀よりは誓字をとりき
ひとよみて誓言の儀
哥 うけひとよ読
さるかとよきに世事はゆるされ
哥 ちかひてはさこそわれらしれしあらく
のんし

これもいひて人にまさるなり
源の融京なりこれさたなり心
さしとみえなるもんとすは事
とひふてあはれなりおもしろし
と源の心中し
かうりもいひてすふかし事見ん
えそ
末つむの事は万よ海されておはし
いそね月日のうきまてるし

今そかきりまてなへつと
河原ありても月日ふりまてとひ
かすみは忘れさてすてしとする心
摘の心中し
もえいつる春なり
ゆ岩そそくたるひのうへのさわらひの
もえ出る春になりにけるかな
私は山言葉して草木の春
ありふまたとへていふへし

たひしらかはまて
（弁）いなしきくしまその名し
関白ゝしとよゝいひしときき
こしねやかりしまもへし　式部云
源経卿よ山かは川といひしかうま
てとゝく　平兼河原を多ゝや
みとひと同音よかのよなかり式部
多ゝしかゝつとゝく
清少納言枕草子ゝりたのし

かゝさゝふ事けり　黒ゝくか
白河太相国乃亭の子日宴席
云草枕多いしかゝまて　松の
ことせと君のといはかゝく
武云平代し　しいやすあるゝく
業明みけ源為綱いそ浪せか
いけまらいなしき君まてとも云
名し河みけ度子考歴　日本紀
度師たとへはいふひろさ下藤

乃仏となり
私教多ル説これを目に危うけれ
去いふしきりのまてとらに善き
施うるし種々の善を修る事取捨
うしとらへとる覚悟のことあり
これをのするりのし
よそりのここくつさうり
源ル海宗にりて行くのよさ自と
まつむのよき事りのこゝろあって

忘つむの心常するへし
ここ力ひとつの
（仰舞同し）世中いむしよりやうつきん
我身ひとつのゑめよされ成る
私深の跡をされ移し時のよし
さはま忘つむの我身ひとつ乃上
のやうよあれしうる海宗ありて
此草花とはよそりよきつのつて
くしき人ぬとのと

すゑ摘のさゐし
大貮乃北のかた
末摘のをとし君はせうそこ
れなけれはつゐかさとそ
弄
如是人難度ノなり
末摘の父宮のいますかりし事も
おとろへもまた
さやうよみへきとおほしし事よ
すとらふさゐし

狩あまりしきな
末摘を狩しと義空へいささかも
世のうき時はみえぬやまち
昇
哥の心
に
世のうきめみえぬ山ちへいらんには
おもふ人こそほたしなりけれ
みよし野の山のあなたに宿もかな
世のうき時のかくれかにせん
此年にうれしも高前なかりけりて

ゐ中みとれむせかしきねと
夷中　田舎
大貳の北方末摘のをひよろつきささ
まにとよくいひかたらし
むかしよりけしからすき
ゆかり姫くしのかしてなくゐり
さしかる事もおもせしおもう
かとをそしのおねすとりとき
いかて

侍従もかの大貳北をさそふ人
侍従ハ大貳の姪乃妻にてありし
あて縁よりかくにてくらてみへそ
まいりけるんが
侍従ハ来みつききてくるへるをさて
末つむをえそまいりけるにつ
心ならすとて侍従なりける忍
摘りもくるるものあはれとせう
みかり

名のことゝけなり
末摘の粋源をとこのむ心のわたし
御心のうちに
是より末摘の心中をとゞきたり
りしなき
たゞれよ心ふかさ
源の古跡をおもひ出るし
ころ力のうくてむくこれたる
して末摘のうきさ果報してこそ忘しき

ねがと歓しのすべし
たちしよりおほよ
家居すこし荒るゝとも碧も
なきさ事あれ綱庭すこさえずし
まひのかねし
しく山への行きさこのことひそりと
末摘乃鼻のさ海を跳揺よりもち
杯ならちさらするゆへり鼻もしく
しくかたくなし

くりかへしきこえし
此ほかにも哥をくはしくしるしたる
又は物にしるさるゝなかきうたと
ふと筆者の跡
いとかきつらんさまの
ありつる事は彼もなきにとし
常陸守の哥也
かの家より中院は此ほかに御八雲
（河）此時分明石は書の名也　彼巻なり

八雲あさからぬ事なりといふ
撰のより標巻なり　許多月なり
此八雲は遺こし　今の詞又以同之
三巻となり同時し　又源平任大臣
その年は二月し　此巻始師君の
詞なりを　撰大綱云との　御八雲
とかりこれ　撰の並は義し　作此
並の御哥　異説あらん　定家口か
源光行年中は　並蓮生並二開

但し伊行か説は関屋を一とした
てこりそれハ時代前後すへし
関屋巻を源氏須磨の後乃年
京へ上洛しけるとて源氏石
山詣りけるにあひたてまつりのち
十月の事しことはくしのまきほう
みをつくしの巻ありし八講のなし
同時の事也しも十月ありのなし
私明石まてよし人家氏八講の事そ

此八講の事あれとかきもしに
うけるしあきらかなれは源氏みを
つくしの巻にし此巻同時と
たしと記すまりととえりせ
備ふるえりもせすふし此釈師
君も世ともうれたしとさまはり
前りけりてしまりつのかしそりて意
するなりへし
されく枕大綱云前の

是より源氏の御八講のおり
さ南をせんしの君乃かうか
かへし
いける浄土れ　生御國とし
かたけなさけの
御菩薩り身とえて源をなむ
菊し縁御君よ御答へし
関わたけかさらともあるま
いはてのみこそ

何
五濁　劫ー　見濁　煩惱ー　衆
生ー　命ー
法華疏云　劫濁無別体但約四濁
立此假名煩惱濁指五鈍使為
体見濁指五利使為体命濁使
連持色心為体記云准悲華經
八万至三万亦未有濁至二万歳為
五濁始云々
やそいそのまひね

禅師の君はさ法師になりけるなる
よくうるへると
おとすくるに世の人みなね
末摘君も此禅師君も納おかる
られむつましうねなるへし
心うつりけるかさにや
源氏の御菩薩の変化にやとせん
しの君はいひしによりてうくい
ぬしそは身をとなさけねすを

いみじう前より大弐の北方なりけ
ゐしつるも涙こあつかひをとこそ北
いと海より西国くよせ行りてか
けるねと
おもかさりうみありと
末摘の乳母さてはこひ出のみすを
あるしをとやうしおりひくまるし
是いは浅しともねびねなと
大弐北方の末摘へ乗物事なそれ

きりしかいさまれんまとめて儀
母さしりゆるし
御所そくみかて
末摘へ御さうそくたまはて春ゆきと
ゐし
おもしろきし紀のてりうす
大戟小方にちそゆくるし
左右のかも
門の左右に戸ひらし

その事も多けて
大戟の小方につまりたる者とをし
いつまうこの御ひしきやとみるあはれ
みけうる綴わるる之れみち
将翊 字元卿 舍中竹下開三径
文選曰三径就荒陶潜明之径を
門よりゆくみち井へ枝くみち厠
まりゆくみちし芝ハいるる家する
あるなし

私かうしとなりける給ひけると
いひし人の荒たる家のしけさの
程をうしてはけをねしる給を
それ給さへくもねとし
なりしのたけるをけにもそれは
此ともいわ乃方の之ん夜の南あかりて
まて車よりのりさとし見えて
河るまいし所事なれは未つむの
舌礼なるとおもわれ候

未てもみなとところくりきあとし
ころもう淀いつされと

猶貴元

私此掛事未皆侍従さ行さ
ましける所にてなるとは
大貳の方のありしを嫁へて
侍従もところへまれと花未
橘の君よりは消されると
くまうしと有りありひて

一 なはすべし

やしなひてこそはへく

あそびくらす(弄)べし

かくしけるくらとりうへ侍へ

来揃(弄)り 侍従をとりうへ侍し

とれ侍従をとかうるし

いそうちるむ事とありひかう

大貳の三位細し すゑつむみすとらる

そうりうれしひるほし

此ころこそ下りさ宰相も

まつむの親業への事をおもひも

よしと京にて大納言さへお

ほせねとうしむるし さおしませ

とも侍従をよびつまてくろしと

此いと宰相をよびし

うちとすく候ささうし

あそれ此す宰相井の宰相やかれて

大貳乃三位れちもるく候さ事

なりけり大弐のめになりて下おり
しなん事もなくおもひて他より
けるとそしゆそうけるし
故宮おはせし時
これよりも又大弐少弐の親
おそふせ
常陸宮の少弐のいのりとなり
見外の事ありけるとおそ
ふせとさひ給し事をおち

あしかりていひし
めしこゝろにくれ
末摘花の少弐のめしなりなれし
なるひてはひとりもおもふ色きれ
と又源氏のかたらひたまふさ
急ぎの事よ我ふしぎの人数に
もおかされとも色かはさるよ
しとしとらせまてゆさ御
とらひしよおもはかりていふ

さ海し人をとしくしくれたりけり
をはの人をとうけるし
大将殿のすと
源氏君はは大将をとらのへと女房
うちいひつけゝる事をいつて昇日
世中此事りさこめもみうりまれと
源中将のかすひ給ひしいそこれさ
ふ流すくせるすとせひ給れはう
まう中しうえ給てうくさひし

きさ海りあいすらよなせいひ
てうりし我ゝつれの方をもち
やすまみと時りりあひゝうまく
み人おこりして本橋とあき
むさ鳴呼すりさ海し人をとく
しき流何母とし分よくはつり
ちりきりていふのつり
京りありつる時は跡をとうりも
まいり給ちりくさと身のしあり

あるしみ虎てらんハおりつるく
せひきこえんすと又おりれさけて
気しくよらふさ強し
八とけても
まつむの八み河りねゆへふあいし
らひふしますて
いとましき事なれと
まつむの返事しかはつへきさ有
世そてハ些まくくらきてすんと

八つるしのゝふてしかことたとさね
心さ強かんしらり
あみ去りなん
又ときと出青の泪しきにさくりり
おりハむなれとかは兼儀さと
陳甚するあれまれしとらふてこれ
もいさなりんの八そてし
ひさう人玉れてきふも
常陸の大なさと源平の又根りこ

うきてみのうてうにうつらんみなと
又あさましさらふし
こゝ後は巻々に宮の御むすめ
式部卿ともあるなれば書ちやま
あとうへしし女ゟ式部卿よみ
まりの人あし　蓬生の事も同
かよひ給ける所くるまあまりしたる
まにうり
源氏の君の所あまたかりしる

みなかよひ給ひてけりといふし
凡源氏も明石より須磨の給ひ
君ひおりしきすとさのかし給ひ
ねりしいかんしうり
やふきう　弁　つうとよむわれ
わとし
なきまくられとてのと
末摘花うしてゐしのゑと源氏
のみてなこゝしこくしみそとれ

源氏をしるべになりしとし
おみとおもへれも　末摘の心
されどうぞくつらも
末摘のおもひ多かり　心さきさ分ありう
ねや　末摘はおもひけり
心さきさ分ありねし
行きし侍従ともにと
小方は侍従ゆかりあとうればゆかし
ぬりんとし

うしいつまもりきよいまで世の
おもひをとへわりに
侍従詞　閲すくしより侍従と心地
きこえのすもあとうりし又おもひこ
はらしも
小方は事も理し　又末摘の多く
やまうしおもへれ理しとさるかしよ
侍従のこともうらみし
このへさくらすそん

末摘の多かりし人もせちにこそなか
りけむ侍従一人なりし
かくこそありしかあまりさこそいふいかなる
男哉　　日本紀に君かまことしとある
私にいふこゝろたて事も侍従なり
道しるしてあはせとさるおもふ
ことしありしるへかきこそせむ
[illegible]哥もありぬへし
私に此しれぬしかある多かりけることわか

みしかき人のかみ九尺よりありけり
一本あるまゝにさこそありけるに事は
なかりし又九尺よりあまりなるもとも
とゝく武御級九尺よりあまりけれ
あるは九尺にあまりあまりつとよ
むとこゝ
私九尺にあまりあまりつとよみて
いふへし
竹
きぬのうへにむかしは八尺武九尺

ゝ御鬢もその長さにしけるか
見えさねのうさきのりも大なる文字大
童とかり逆代ハ暗しうるゝ
私末摘君ハ髪にもまさりし前
にも見えしより
むかしのくせなり
行
薫衣香　親行云　為家卿ハ
されしを源氏聞給りいふん
元めしよりの舟ものゝ袋ある耕雜

儀式今者不見侍りし　薫衣香
を黒方の一名とも云ふ又ハ薫
物の趣りかしゝ　然るに名別の方
なき旨ゆふ様巻に侍る
哉御撰に薫衣香ハたきもの
趣りかし

末摘花
来てましきすちをとこのましむかう
ありひのうとにさけるあれあるか
此侍從ハ末摘のめれとゝしされたる

たゆましきねこ　まうてつかうる
らんすをとりて
あまつのみのすひし
よりしきの君の乳母の事也　大い乳
母の通稱也
末摘の君のめのと　侍従か母也　あさまさき
りのてめのとをほまして　とそしへ
てうしくへし
侍従か母の事也

うひたまさるかなりとも
末摘の我君の事とのたまひて
うちまそへかてもとりけれと
たつさふ乳母をとはせひをつるも
ことわりとし
あいなれと
末摘君の事也
このへも　侍従もかし　うちまいらせとらえさし
乳母のゆいごんい

伯父の祖母の遠忌よ及ひけれはとて
て来りせんまいりてまいると
さひのあはれ縁りもあはれまて
きと届かりしひきすさ調ならは
侍し

とし比の世ひのこさ
数年隠世も忘れにこそしけれ
思ふに讃ありしておかはまはれは
ますますとさすらにかなしくもて

玉伯従
玉かつら絶えてもやましゆくみちは
たむけの神もまけてちらさん
手向けの神を道祖神とこれよ
ちかひてかくて渡り来たんとき
玉かつらとは幸将てき女の鬘(カミサシ)の
もとらなくしてかつらともかつりや
玉まかりかつらなし或男の縁をもふ
よし好撰ならんしらは
伊勢集なりあのへゆくへふか

深く座なとく
あ深りうしんをはりてゐる
まりあけの精とすへきそうれしき
ね井へゆく人みかつくるすとて
最うこゑまうしも喜しく此方の
たむけの精とぬそうまうしき
まむけの精そ道經精の事也
蹴鞠の人ありねさ給へ乃物を
そ深此精の年々のとゆし　芝蓮

中乃行精也　昔黄帝四十餘
九子の中より家来乃子鞠行
乃遊ひを好て殺不留　宮中ニて
遂ニより蹴鞠此道ニて死ぬ　其時
誓曰吾為神行宮を守護し
とて　昔の名を遊子みな号すと
其是人深井ニ精とみまりの居經
精也　此故より鞠人鏡道の
所をまつ經席となる云　世俗より

まさ人の部とも又たむけの部
とも号すへし
花間祖席離人醉　水上帰帆
落日行　元稹
道神　和名　楊唐韻云　楊音揚
漢語抄云　多無介乃賀美　論語
云　季氏旅於泰山　注　旅　祭名
也　〻〻　郵　今此名よ通用也
いのちこそ忘り侍りね

いのちこそありけりかくのちかへ
の名をかへる也
いつくらうまうりねと
小宮此よそうしふるし　未離の思
ひ立給ひねすゝ集しし
さ自ある〜し
名とそへて　侍従心し
さしつるひつてと
侘　漢語抄　嫪懐日

たれもみなかなしき
よを経て家つくるもなれ
ましこき物ともさくらなれ
つけてとまるましき志ほをとふ
やとも行るらし
くるつきてあかれ
未橋の尼
霜月ちりけよみれは
蓮生の屋とりのさひしくしく

うき身のさ海うきあまのせか
よをさむくつのうけよふきつつて
こしの志らつ山
行
君かゆく志の志らつ山志らつ緑とな
雪のまよし絶えてつ緑ん
雲のみる志しの志らつ山あひよそり
あやしのそしのゆきつりまて
弄
復古のお緒りもかひの志らつ緑
おりひ屋つ家とうけつ他難し

私おいてハ今日より及ハれ宮此
ふつゝさ御しおりしらくまゐり
まさこゝろひと御きつかひつるへき
御従君のよろし
ありかた御しき
御
藝つりまゐらし
私ちゞまでこゝろうちも同し事し
その節はおめつらしく存
御
めつらしひとかたならめでたしきし

ひハつまゐらする約しとまりひとゝ
いふまゝし
私は儀なり
私は服は源平九條京し好候く
めつらしうり源氏盛なるくりやう
まゆへり候いと御事さ拝さと
いふ元は萬下拾え姿は源し
めつらし人は菜し　或　持守り
ましてその人を　末摘し　源の川し

まゐるへくかゝり出来橘君にもそ
れとかくこちのかたさいはひせさは
急しくされともましてと云し
とりかりね
源平女八景し　二月に内大臣にみ
あそのふ弁日
御月にかゝりに毎ちるさゝと
私みと治てしよ女月毎つましくな
みな花ちる里へ源氏の後線く

とつまたまふし君てかり出
時日筆の事月おかりけりさ
しへてとゞ河りにまさりを
日こゝろへつみ毛ますゝき
てさりしきかとり月さしそ
まりとありまさぬかにわり但
源標にはみ鶴の言の贈答かり
まゝりに源ハ御月のましめ并
のゆかりと君毛みの時の寄へし

又私澪標巻とりあはせ侍りしに
花ちる人おもしろはなる月有明
明石姫君の五十日うかゝてすきて
五月雨のこれすむ庵りし
見しあかり此巻によへなれ卯月
乃をし花夕月夜の比か君も
おもし時にかつも後へそをむ居
よろこはしき見とはへしよらへちり
もまくの月みまし

多いのうへよれいと海　紫上へし
むかし此御ありき
源の昔此頃思ひありきし
かくとすく行まてつゝ
常陸の古ことし耻もすくあまてつゝ
おもふさる御松よ夜のさゝかりて
河豊之
人よまさやとかくりへる夜乃これ
洗りのことうらし風へみれ
弁
此時のさ海なむえんし

風りつささて
引寄とてまいらし
まちこれたりかほりて
花ある云梅のつねと又おもしと
此時あさちる置人ものひのかたの車
みれともそひともそみえし
かしこそみえおかり
車にあたるより源のさしとそ御
らんするとし

さやうのさやうなるまちり
こしぬらすると源氏あそばれし
此夕がほれいのむしとかり
いとかつれそて
源のおもしろくして車とどめてしみえ
さていひちれ夕そうしかふ
源の惟光よ給へとし
さの御りと　惟光の名をとし
ことゝりし人　まつひし

まこやすゝしらん
そのまゝ末摘の花のふれとし
よく見つゝよりてとうらそよ
あれ横笛をよく見そうし源の
立より給へらへりしを人なれ
のをむかり着つれていゝしれ
源の君捨し
あてよいしくすゝめ後さう
うらつきうきみとふりあさひしき

さ南のうへし蓬生れ君の跡をと
いふしゝすめ後さるへり西の方も
あるる
さる猫の蔓り故蔓の
弁
父宗あるのしてんのゝ放り鴨蔓
ともらふ属し打ふし源氏の門
めふ時し
付
宰予昼寝　論語
とりわまてゆひさしのうしつさ

さしのそかせて
此経の箪中ハさゝめし
よりきりて
掃部みえしてひきちかうる
猶もし
采女
あさくへとてうはたりしハさまよふこさに
あまてらほれのしつきくそうか
弁
此弁さし感ける折りしてあわれし
なにとする事かし

さねりけんにつる書面やいかにしつの
こうはたりしハさつつうらん
或御説ニ采橘花ハうさいつれも
よろしうねう菟は感のおもき
さまさりけりてめくるし
惟光うるさこれさへめくりて見るさ
ゆきしハみちはさりるれと
此末は惟光ハ見のれとへせさむ
とはんとねとし

おそろしくさふ
らひける事ゆへうしろめたし
まいらせて御みをさきにたて
恋人のさ海や
名のりして
惟光まいりところへて侍従より逢
つきよしとらふし
これはうらにすん
恋人のゐすし

されとおりしらくましき
（花）これを侍従ゟをとこの女房とらふ
ぬし
きしまさり
惟光は前ゟきしうる忠すへし
うらみもらひもうしを
惟光をとらひもうけをおとろくし
もしきつゆすそれ
荒らる所ゟ侍へされし惟光を狐

うまかれてせられて
新楽府　古塚狐云　大尾曳作長紅裳トス　狐乃女となり変せ
る時ハそのを尾を紅乃裳となり
なせりと特表するさ乃男をと
めて狐の変化なりとかく
くなり　甚時ハ尾をを特表れ裾よ
変すへし　男となる女となる変化
するなと

まし給へんぞけるかりしまかりしさ
これよりは姫君の詞
なかねはなりさ給
末摘花はなかなかけ深き人よ
らんとおもひすしとまひなる門をを
きこえてよ尋ねのなと
うしろやすくとて
なりのましふののへとも
かりせのかはありさ給ふれ

老人の返事しとて人みなとり末
摘のあひのかていうてうらみ侘
若人うゑかりそれまでいはれもせん
するそゝしかりてやめんと
おりしろくうまつり
としつゆく人我こゝろをも
これより老人の今までまちえし
給し末摘の心我とて又も難陸
なかりし幸福の事すゝとことや

かくて生人とすまひ程より姫君の
むつましくおもひてよろしく
先は甦と源八やさんとて出る
老人の約束りてさたなし
まゝいとよくしかりつる
源の姫君よれのまて
もうしうん多くありまして
おもしろくうまつり 姫君我あり
ま由を源八やし

いかにとなれは
源の性は勝し
我はたれならさりけれはなり
源の義をとりさりけれはさらしてよ
のさへかに前後狗し
いかにすへき
ふたらより始りしを源はさひ
やすらひのゝへかさなし
まにさしそいかゝ紫ゑてもしそう

らうしへき事
たかうつすと書緒はあはせまうしき
を源のこゝろしそのゝへかさし
ふと入始りし事
たかうるまうしき書緒とはゆかしき
うついゑうりんとまうしそ源の
なとそうし
ゆへすらは世にそと
なんすとしとてのへく横縦と

伝授しうけまゐらせしの
ことはとかく返哥なれは
出来すりとあらしてかさなよ
みうけおりねし源の返しを思し
時ハ哥かすとよみへてみしる
とみて後へおかはえんなる人
君を末摘の心をそさといとお
しく思しをかりおそてさる
ありさし

見ゆるにけさせなかなしき
姫君は源へ申さるし
君よりてもみれてそとりあへみちなく
ふりさよりしきのつもりのかたこと
言とゝまるらしかなかの事もなき
をすへきやうあれハひとのことた
まふ人ありしなし
私よりても我てとこかなとは
末摘のかくちなりとかしくお

いはれたる物人にさへて申すか
ましきしられたにも見えて
身てやうしとし深のためう
仏祥勝し　此来楊をかうさち
河しき故り流俗し すて
ね仏前ゆるかきわ
なまとおりの人を
帷光乃ありさまのふうのさ海
ありせとも裕下車して

問　入のまなとりて
流さまの歌とむかのむかして
私此事古人様くのみなと仮を
とりくもは何乃例ありみさ
きの歌をとるの歌してきなひ
ふうしと心得ゐし　但は学のた
めり河海　弘安源氏論議また
よ仮を
帝王略論曰梁孝元皇帝特

極群書少辭冠世不好色声
篤信五行多忌諱庭草無
莫令鞭去之江陵既陥王僧
弁等立第九子是為敬帝
太平二年禅位于陳對江陰王
或説八代記云梁武帝馬の鞭
とりて為と云ひける事見
と云々可勘
春秋獻梳及馬鞭 日本紀十九

弘安源平論議云
十五番　右問云　為方
えたけのかはしきまゝに此
為と馬乃むちしてとれり
為てかのよまさに此景氣りて
坐鞍行りや如何
左答云　具顕朝臣
此事日本紀にもみえよしれ又雑
儀釋りも見及ひ侍らはこそ

も多く京氣たらりなかりつきし
但おりひらけるてことゝよふ事
将るよまて此問乃はあひとふ
らひ給りつゝきてさひよまてへ
らるゝ事侍り梁元帝北面す
より底の蔓をとるのむちして
といふ事将るゝやきし此故
まて給るなん

右中

此事れ遠すく侍り元帝北面
家まをひたりいはゝすを見て其の
時世おさまりて茅茨きらす
采椽削られといふ文重雅
よりとよふ虞ゝを同叙なる
あまそく泥も秋の黄くれなきて
おりしうさ須し
みるさ所あつゝ　哥ふうの寄は出よ
まきりてとることも

竹取
みさへひとうきまゝ世なきの
そのしき後は前にまされり
昇
其今の歌乃しきさは前かりし文
城のし本にしき歌とある
やさとなり
私これは達充乃ゝるなし
本のしさ歌とらよ前なり
秋の時前めさてとおほりしく
かまり流のさゝきへしと御覧

そさし多かるし
へすふみつけてもいとむつかしなるを
何
無縁し
取れある達のあるさ海又さへのかる
ちかうとをくれぬ事多くし
うひかさやうのんん
多ちましてみる人なきそ
同かつしうねかそり取しとや
賢君はさりとりと

源のまゐれるて給ましかりとま
摘れ多のりしくおりひ法師り
けるそくまし悲れとみととろ
てかさ後をそうしくおか
もとし

ゐゆるとおかされしゆうるよ
大貮の少貳れ来りせし法りそく
をはんおるいうれうやおほして
さかうゐとさ今多てまゐりける

よせんうさうして急給し
あふの法るうさ何
細諸香章樽し
のましけるれ木丁
大貮の少貳れ来りける所よまし
けるる木丁来あ
いうま給て
源れ因へおりしてと
そしたるのさうそみもゐさうりは

是より源氏の詞

いかにてもつろとさこえつゝ
源のたゝりはわすれさりつれとすゝ
つもりの方よりおとろかしかね
とうふ山にたてゝたへてなし
つるといまして(の)世書とうとち
なしのかへると
枝なかね立ちれ志るさに
(行)我いかはくみの山にて迄しくれ

とふひきませ　枝ふて家門
(花)みもの山志るしのまわりせんとる
かれかはくれとこのん
我やとのまわしは志るしかみゆかり
枝山しかはあるのとまゝし
今業枝なかは君あへさたまり
おくへ予と枝かねあつちされ
とうらゐうして君のまとれかな
よしのみよて

卅
杖ハ菊の花ちかしみれハし
或杖御説杖すゝね本すちとは
松かりかゝとまる座乃事

まけきこしみけり
九くゝ色りまけまゝし
おりひあそしてそ
うつ御身まけうつ人みなとを待まつ
きうてうましてあまれゆかり
御身しくと来揃れわのうすれ又
をりみそとあのとし嗣はそしを
あしみな草ようくれけり
そ御れ露を深のあうれとは

おもはし
ますらをねんずるひまに
源乃よしなれはよくねんするひかり人
此御なをきゝしとおもひてうち
よまけへよしや
さて此世におもしゆすらん
海京の後も物事共けくそうふ
まうそのさ海をとりのなし
さひしふ多うふ

いとこそ海さりふまされ三行しと
さひしふ多うふ人此つるさは
私今よりハ去暮わるましきさ海
とのゝとひちさるし
何しもおもひされぬ事
流なよりさのこおそうねん事も情何
ふそのゝひとれし
立そてまり給ひしも所此さ海
うて此蓋うさ海一夜の旅枕りそ

ひかりさしそへし

乃語ひ
下にて
竹の節ひも
つけし

陶とゆきさ淡海
さ乃秋の落る涙の玉かつらさ川
うかりんとさひゆりうるし
色さえへしきつねと松の木かけく
（は）りうへし玉ゐしくこそ色は表れ
松の木かけく成りけるかな
り寄ゆ名れ松はかへしよみかう
緑と木かけくみかりうると鶴さ

まよなし
私り寄れなは松の木かけく成
くるとなてりうへしへの若さ
名れむ理みりとらふし色は深
乃らへかまへるみれと松乃まれ
ふかりくるをとらふしさてうれし
きつねとらって
関臺兒恚成人閭林恚喬木
菱のやうする故事の

深の鳴声かくへと歎しけるて
夜すミのうちさうく見え川家は
松てそやとの出家しけられ
上れ羽よ枝すゝね本さちの羽よ
アとよりこの身へ家し
私花鳥よ三輪明神乃事ミれ
ひきり　甚事よは後へうつきさ
ましとも彦は須せ
松をと出家しとらふ事をも上昇

ありも見えし有り又三輪乃明神
乃住吉の明神の所へかよひ給
ふ事有り　捨遣よ　住吉は
きしをせさるん地ゆへふ移うく
やへうりまりといひきん時哥と
すミよしの御鎮宣と出さうしさ
家を三輪乃明神とまうちのよ聞の
事ありひとすみ世すゝ主神女神の
家へかよひ給ふ事ありとれよせ

あるひやつれし源氏君乃よも
ぎふの宿を尋ねおはしまして
こそ風情の志なしみゆれかし
そよさのふかくへしまさつむの
返事しをまつ志るしみさきかる宿
もあなし似ても候へし
或御説にもまいりてとれ末摘の
源氏をなれまちあるをまいりてそ
宿の志るしありまれとその御

まちわびつるを志らしけりまい
ろそつうをよきのまへあらし
歌よみかわりける
まうし九重の歌にあさかお
しらやうさや
ひさのかれはなをとへし
にたひきやひさの閑ひしをとらへて
あまのみかさいさりせんとも
私すぬれしのお借し

又やしへ帰りなん
さてもよみうすてゐし行へら
むかしを源の紹介しいかやれ
みやしろをすとする人もありなや
らんも志らぬこれいかしかしも
すて思ふとかこ地ぞ哀しくのこ
まうそし

五条橋
やしてまつ川志ましみさき我背とも
ものあまりよゐねとしりよ

大かたうきよをかし花のたより
も若しゐねかりうといかれ又
うきうひするれ乃あ紀て世やせ
紀らきうひする心そそ絶へ月れ

寿ひ色梅花香も
大貳少貳のまそてまつれかかせそし
月いりうきなきみりて

おりしもさき浪し
打よせしくこゆる
こゑまじくの名残
武御縁ここしくこゆるに
むかしりうらね
ぬれてことすこれらうをわるし
母ふ草よよやつれゆうくの見はかよ
又いこやひえにみる
母ふ草よ母やつましとれ古弁する

君母ふ草より座つくし旅に出て
松むしのねそかすしうりける
とも打かり言ふれ打うを
昇
出れ打れうるさ浪い見るあれあれ
まよろはよりい又見やひかり見
ゆるとし
私須すしのす人家さ浪いうとうこ浪
みくさき浪とし おりしろくかき
えせり

むかしおなしところなり墳こゝろかけたる人な
りけるを
此事一変せさる事なり奥へな
とにしてもあらす哉御役
なりも墳こゝろかけたるとはむし
貞女のありしかうそあれと
人のいそひありとて家をとゝろ
東もすりつたすりけしける
ますへしとそ　九経掛図之

を
此事いまた一変せさりけるとし
顔叔子ハ男子也奥へハりし女なと
にあひおもきせりける乃中経云
のおもつるいさゝか何る事なり
これハ海としきたをと思ひ
常陸守の事をさりつかひや
私前なりハ丁ころかる貞女
とあり
弁
何海氣叔子か事とそ　貞心のまと

花鳥にハ乱叔子ハ男也おつる
の中細云乃物語あり丁こけれ
也海こし来女れ事也云々
未一決云々　畢竟不知なる人
乃事なるへし　河内本ニハ丁ト
アリ　私案花鳥ニハ誤とかへし
（奥入）顔叔子をいふ人ありと他行おほ
あひさそれ男れうさひのこあ
より誤のうへとこちてしも

よそうありてあるる事也
古人只一向乱叔子事云々　定家
卿ならハ誤とうちさはとあ
る或文書とかきてはなも
ありやし　奥入云　乱叔子をいふ人
あひとの他行の程をれまのう
きまひのこあり誤乃うたと
こちてしもすゝとりしわ
きしてあさるなるし云々

毛詩曰昔者顏叔子獨処于室
隣之釐又獨処於室夜暴風
雨至而室壞婦人趨而至顏叔
子〻〻納之而使執燭放乎且蒸
盡壞屋而継之自以為避嫌不
審矣若其審者宜始曽人然
魯人有男子獨処室者隣之
釐婦又独室夜暴風雨至而室
而室壞婦人趨而託之男子閉戸
而不納婦人自牖与之言曰子何為
不納我乎男子曰吾聞之男女不
六十不間居今子幼吾亦幼不可以
納子婦人曰子何不如柳下恵然
嫗不逮门之女国人不称其乱乎
男子曰柳下恵固可吾固不可吾
將以吾之不可学柳下恵可孔子
曰欲学柳下恵者未有似於是也
巻白篇此㝎毛詩史記以下共以

為室欲堂卜云事如何或云堂者
佛閣人家ニ通スル也佛閣ハ堂人家ハ
堂也其各別し塔ハ一向ニ佛菩薩ヲ住
所也非室儀矣若今物語堂字
室字ヲ書誤欲焉魯之疑也又曰注
文選中有所見云々未勘
或説にハ乃中納言の御給ひしとらへ
おもり源氏おもかゝり以後のおほれな
云貪家の家の女 号小大輔 机丁乃

かきこしとこねりなひてこそ
ふる事ハ何ヲ云事也丁ニや
作ト云ハ破義也云々
晋すしさ候りて年ふりすけりも
私云此物語のうきさ候御調度
ともの事にあると源氏ふん
御縁して おはしそんのうちや
むかしの御縁ありて 謂ふわこうちて
身宿にまさる事もすけてふ任事

ある人さやうの事めしさへおは
すり此御前とものあかりねとあ
それと此場へするとし
さてふかりおつくし
これより末摘の花を源のおかれ
ひとし
何かさまてこれしと
風流のうきうちたくみ何かれ
まんとおうせし されと何うと

こそれしうくといておもしくお
うれとし
此めうにしとよみうねよ
歌
花散の家はさ源もとるやう姉
らね所られい末つむ乃家の何
まうるもめうしをれ外うう
ねとし
とかおかしかくれ仏まかり
末摘の家は事うるさ源もとの

外は花散とはかたらねゆへ世乃
ことのうくれ多かるとし
まつりことけハ
（以）賀茂祭　斎院御禊し　并同
さう車かさりも御らんくに
源乃御かけよかくれなるくりくの
うすとらせ
二乃宮りハ
末摘君し

さりとも
いつくさとらハ知　　下部
（以）太うこうとの事ハん
私やうて二条院東の院へうつし
のすみつき御后御ゆかりまうて
その御後見とかり世亮り
太うるれ
ようきのすの事を
源の君をすゝしまいらせし

此ふミいとこ海中に
源の末摘へつかはされしこまや
かにかきつくしさ海源の性なる
岑猶さる所し　二条院にて遊ひ
所とは東乃院のうつし
よりきのはとこすれなきさ所のさまて
其今代ともひのつくしかさうりも
此蓮生なるとうりいお思ふりの
此ふことゝとゆへし

そのさうりとさて
源のおさへむきてまつこて
女ともの心海し
なけれ此すきひとても
ゐひしろしみとさりの心し
尭よみとなる地しなけ中りのさ海に
すきひりのとし
心ちにとまるふしある
おり錦にすきひとても　一おどろき

高のおよ
した
ゆよのてに
それおる姫
道

朱云 すへてみたらきの声を(?)捨(?)

かゝりハ源氏のひよりみえねと
人のさかりとふりし末摘
たえしうへかもかゝるへといい
みなれしおもしろきそこれも
さきの世の宿縁なりとて
光ハ源の性也奇特する所しな
をさりけりもあかねは我さく
見すてぬはかなさかるましき
をとひゆりのかなし

きりひとは
源氏ききにと おりあはれ まうとうそ
むかれてさき 源氏れし うねんと

梅ハかきりとあるつゝそて
今はたや源氏易かりしりとなひ
てはかしく人し此事と云し
花そくすとろさ
これより末摘の花此なうしゝうる
をとおもうし
受領のさや乃家にしあるへそなう
それつしさるのこと事
末摘の性此ならううなぼよなう

ひたちはくにの又受領すとみえし
なうすこしりうちひて末摘花
方をとさこひくるし
君はいふしへかも海さかりゐる
源のはよし権威ある家を海とし
おのさひやりもましして
玉川ミ称し時おりひやりも云
星のひくるし
あかりひいて

常陸宮のみきりしししくみわ
よる称し
本草は花にも多しとらぬをれり
おのりとやそは本草は花にも河
紅れりまつしまむりと
を本草は家もよしみまうさく
也とくるを和花紅花和とい
つはんし
とうるおりえんうさしもありけ

下家司

源乃下家司ともの数多あり
何れも志ろしと定られ行ハ
ねたのの人も此等席多人まりて
進從しおりくし其も源の惣
みしおふをとれりてそし
ふるとせりけるのまける事なり
これよりハ摂家の家よりこ後の
事をも沙汰りの世する詞

此詞ハて一ある年より定まるへし
私芸より摂家の要をとりて
うきよう詞し
ちりきしめれるとふく
志ありゆかあてうとらりて
かり大貳ればのこと
年のうつりける事ニ先例の
行来をとりまるへし
侍從ハうましきりの

末摘の花のやくあはするをとゞめし
くらふあらう今まうし懐悉
せさせし事をさへしも侍
従のさふらひし
ともこしとふりてけるも
紫式部紹し
光叙後をりのかたりの家着略し
ふる狗し
うらゝく

何と名んあむつうしきと
きこゆ人もとそ
これも二股に書うしく侍や
有り御わさと以外数しわらひ
ける狗りせしとてきこゆへき
とこそ書りけれ